
イドの底から

二三川練

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イドの底から

【Nコード】

N6392X

【作者名】

二三川練

【あらすじ】

寂れた喫茶店『古井戸』。昼はただの喫茶店だが、深夜になるとある者達の溜まり場となる。暴力少女、アキラ。軟派男、イブキ。独善医師、ドクター。色魔店主、マスター。これは、そんな変人達の中でも比較的マトモであるアキラの騒がしい日常を描いた物語。

「アキラのお仕事（裏）」 1

午前二時頃の暗闇の中。静けさに覆われた街中を、一人の少女が軽快に歩いていった。

闇に紛れるような黒のタンクトップに同色のホットパンツ。吊り目が目立つがまだ若々しい顔と比べ、些か早熟なように思える胸を揺らしながら、少女は楽し気に歩いていた。

やがて少女が足を止める。その目の前には、窓の無い寂れた喫茶店が建っていた。看板には『古井戸』と、喫茶店には似つかわしくない名が記されていた。そして少女は、『CLOSED』と書かれた札を無視して喫茶店の中に入ってしまった。

「あら、いらっしやい」

少女を迎えたのは、カウンターの中で頬杖を付いて座っていた女性。素肌にワインレッドのドレスというシンプルな服装と眠た気な瞳が彼女の妖艶さを際立たせていた。

「よお、マスター。相変わらず暇そうだな」

「それはお互い様でしょ、アキラちゃん？」

意地の悪い笑みを浮かべた少女―アキラの言葉を軽く受け流し、マスターと呼ばれた女性は笑った。

「それでもねえよ。バイトもあるからな。あ、オレンジジュース頼む」

「はいはい。でも、中学生の家庭教師でしょ？ 思春期の男の子と一つ屋根の下なんて、羨ましいわ」

舌舐めずりをするマスターからグラスを奪い取り、アキラが舌打ちをした。

「ざけんな。女子限定の仕事だったの」

「あら、勿体無いわね。思春期真っ盛りの初心な男の子と、巨乳美少女家庭教師。シチュエーションとしては最高なのに」

「その口にグラスねじ込んでやろうか」

マスターを睨みながらアキラが乱暴に言う。しかし、その獣のような鋭い目に睨まれてもマスターは怯まず、それどころか、更に楽し気に笑みを浮かべた。

「冗談よ。本当、可愛いわね」

「……チッ」

舌打ちをして、アキラがオレンジジュースを啜る。少しだけ、彼女の目付きが和らいだように思えた。

「でも、アキラちゃんだったら女の子もメロメロになっちゃうんじゃない？」

「まだ言うかコラ。……まあ、たまに熱い視線向けてくる奴ならいるが……」

「あら、いいじゃない。みっちり教育しなきゃいなさいよ。体で」

「よし、家庭科の時間だ。まずはその口縫い付けてやる」

アキラが拳を鳴らしながら立ち上がると同時に、店の扉が開く。飲み込まれそうな闇の中から現れたのは、黒背広を着こなした茶髪の青年だった。

「あら、イブキちゃんじゃない。いらっしやい」

「よお、イブキ。早速だが帰れ」

「やなこった」

ヘラヘラと笑いながら、イブキは椅子に体を投げ出すようにして座り、深く溜息を吐いた。

「お疲れのようじゃねえか」

「確かにお疲れだぜ？ 俺はお前と違って忙しいし。あ、マスター、スッポンの生き血頼むわ」

「そんなのあったら私が飲みたいわよ。人の生き血ならあるけど？」

「いや、生憎鉄分は足りてんだ。なら、代わりにいつもの頼む」

「……イブキちゃん、いつも何飲んでたっけ？」

小首を傾げるマスターを見て、アキラが悪どい笑みを浮かべた。
「うわあ……これは恥ずかしなあ、イブキ君？」

心の底から嬉しそうなアキラに茶化され、イブキはそっぽを向

いた。

「……うるせえ」

「ヒツヒツヒ。おいマスター、こいつにミルクコーヒーを九対一の比率で」

「やめろ馬鹿。そいつはコーヒーへの冒瀆だぞ。マスター、ブラッ
クで」

「はいはい。いつもの豆でいいわね」

「……覚えてるじゃねえかよ」

恨めしそうにマスターを見つめるイブキを見て、アキラが腹を抱えて笑い始める。イブキは笑みは絶やさずに額に青筋を立てた。

「ふふ。さすがに、夜のお客は貴方達だけだから覚えてるわよ。……あ、でも、昼のお客でたまに『いつもの』って言うてる人もいるわよ」

マスターが短い黒髪を撫で、艶めかしく溜め息を吐いた。

「困っちゃうのよね。昼は人も多いから、一々覚えてなんていられないし」

「……良い事考えたぜ、マスター？」

困り顔のマスターに向けて、アキラが心強い笑顔を向けた。

「『いつもの』って名前のメニューを作っちゃえばいいんだ」

「……そりゃ、ぶっ飛びすぎだろ」

「でもアリかもしれないわね。じゃあ、『いつもの』をどういうメニューにするか、案がある人は挙手」

「はい！」

「はい、アキラちゃん速かった」

二人のノリに着いて行けないとでもいいたげに、イブキが肩を竦めた。

「飲んだ瞬間二十種のスパイスが胃袋でブレイクダンスする。その名も『胃痛物』^{いつもの}」

「……ただの駄洒落じゃん。十五点」

「スパイスの配合が面倒くさそうね。でも、保留」

二方向からダメ出しをされ、アキラは口を尖らせる。

「ならイブキ、てめえが良い案を出してみろよ」

「いや、普通に『いつものって言われましても……』とか何とか言
って誤魔化せばいいじゃん」

「つまらねえ。二点」

「でも、それしか無いのよね」

そう言って微笑むマスターの顔は、どこか嬉しそうだった。

「でも、今はボケる空気だったろ。空気読めよイブキ。ボケてねえ
のにボケ野郎だな、お前」

「ボケボケうるせえ！ てか、今日は折角良い仕事持って来たって
のに、そんな態度じゃ頼めねえなあ」

「でも、どうせ他に頼む奴はいねえんだろ？」

「……それもそうだけどな」

イブキは再び溜息を吐くが、その瞳は楽し気に踊っていた。そ
してマスターが淹れたばかりのコーヒーを啜り、満足気に頷いた。
「うん。やっぱ、このコーヒーが最高だわ。淹れる人間が美人だ
と、コーヒーも美味くなるな」

「あら、お世辞でも嬉しいいわね。店主として喜んでおくわ」

イブキの誘うような視線に、マスターは色気の漂うウインクで
返した。

「……コーヒーなんて、苦いだけじゃねえか」

「ハッ、そりゃお前のお子様な味覚じゃ分からねえさ」

「子供で結構。寧ろ、ネバーランドで果樹園でも開きてえ気分だ」

見せつけるようにジュースを飲むアキラを見て、イブキの瞳に
妖しい光が宿った。

「でも、体はもう大人ーごふっ！」

言い終わらない内に、アキラの拳がイブキの鳩尾に突き刺さる。
胸を押さえ蹲るイブキを、アキラは静かに見下ろした。先程までふ
ざけ合っていた時の雰囲気と違い、本心から怒っているようだった。
「次にふざけた事ほざいたら、目ん玉をコーヒー豆と入れ替えてや

る」

「ちょっと、コーヒー吹かないでよ。掃除大変なんだから」

二人の女性から冷たく扱われ、イブキは頭を抱えて嘘臭い鳴咽を漏らした。

「ウゼえ。いいから、仕事をよこせ」

アキラの言葉が終わると同時に、イブキが何事も無かったかのように顔を上げた。その顔には、道化のように不気味な笑顔が張り付いている。

「明日――まあ、正確には今日か――は確かお前の検診だよな。その時にドクターから直接お前に伝える予定だ」

「何で、んな回りくどい事しなきゃならねえんだよ」

「それもドクターに聞けばいいぜ。俺もまだ聞いちゃいねえし」

イブキがコーヒーを一気に飲み干した。すかさず、マスターが二杯目を淹れ始める。

「てか、今日は仕事のシフトあるから面倒くせえんだけど？ 検診には行くが、てめえの仕事に乗るか別だ」

「俺の依頼じゃなくて、ドクターの依頼だ。てか、お前まだ家庭教師続いてたのか。とつくに生徒ぶん殴ってクビだと思ってたわ」

「バイト変える度にてめえのコネを使うのが嫌なだけだ。それに、給料も中々だからな。まあ、それでも足りねえからカツアゲは続けるけど」

「……ま、目立たない程度にやってくれよ」

イブキが呆れると同時に、二杯目のコーヒーとオレンジジュースをマスターが置いた。自分に話が振られない限り決して口を挟まないのは、喫茶店店主である彼女の性だ。

「……ん。そろそろ時間か。俺、行くわ」

高そうな時計を見つめてから、イブキがコーヒーを飲み干した。

「またナンパか」

「またナンパね」

「またナンパだ。いや、今日も実は良い女とよろしくやってきたん

だよ。けど、ホテルに捨てて来た。やっぱ、体の相性ってのはあるわな」

イブキの言葉が終わるや否や、汚らわしい物を見るかのような目でアキラが唾を吐いた。イブキはそれを口で受け止め、わざとらしく咀嚼しながら立ち上がった。

「……さっさと痛い目に会っちゃえ」

アキラの暴言を背に、イブキが店から出ていった。

「アキラのお仕事（裏）」 2

平日であるというのに人の多い病院の待合室。広々とした清潔感漂う空間の一角に、アキラが座っていた。傍らには肩掛けのバッグ。服装は相変わらずタンクトップとホットパンツだった。鋭い視線は手に持った分厚い本の上を規則正しく動いている。

ふと、アキラが太腿に冷たい感触を感じた。目線を落とすと、幼い少女の円らな瞳がアキラを見つめていた。その小さく細い手はアキラの膝に乗せられている。

「……どうした？」

「……ママ？」

その言葉を聞いた瞬間、アキラの顔が引き攣った。しかしすぐに表情を戻したアキラは、大きく息を吐いた。その右手は、怒りを握り締めているかのように細かく震えていた。

「……あれ？ ママじゃない……」

「……ああ、そうだ。俺はお前のママじゃねえ。……そんな年でもねえしな」

「ママは、こんなにおむねがおっきくないもん」

「……それ、ママには言ってやるなよ」

アキラは本をしまい、呆れるように額を押さえた。その手はもう震えていなかった。

「ママはね、おむねがペタンコなの」

「うん、もういい、やめてくれ。こっちが悲しくなってくるから」

「おばさんはおっきいね」

「おばっ……！？」 お前、もっとよく見てみろ。俺はおばさんじゃねえだろ？」

引き攣った笑顔で睨みつけるアキラを、少女はまじまじと見つめる。そして数秒後、自信無さ気に呟いた。

「じゃあ……おじちゃん？」

「……オーケー。どうやらお前には人をムカつかせる才能があるみてえだ。将来有望だよクソガキ」

食い殺さんばかりの勢いで、アキラが少女に詰め寄る。しかし、少しだけ怯えるような少女の気配を感じ、アキラは無理矢理明るく笑った。

「いいか？ 将来の為に教えておいてやる。年上の女を『おばさん』って呼ぶんじゃないか」

「そうなの？」

「ああ、そうだ。『おばさん』って言われて傷つかねえ女は一人もいねえ。だからな、次からはこう呼んでやれ」

興味津々といった面持ちの少女に、アキラは満面の笑みで言った。

「お姫さ——痛っ！」

アキラが言い終わらない内に、その頭に拳骨が落とされた。

「子供に変な事を教えないで下さいね。あと、順番が回ってきましてので一番の部屋にお越し下さいね」

アキラが振り向くと、三十代ばかりと思われるナースが立っていた。顔は笑っていたが、その目には有無を言わせぬ迫力が宿っている。

「おいコラ、クソババア……てめえ、俺の後ろを取るとはやるじゃねえか。どんな手を使いやがった」

「最近、ナースの間で流行ってるんですよ。縮地法きりさきが。それと、私の名前は霧崎きりさきです。次にそれを言ったら薬にタミフル混ぜますからね」

「縮地法が流行るってどんな職場だ。治す側から壊す側にシフトチェンジか。破壊と治療の永久機関か」

「うふふ、それはさすがに冗談です。……私にしかできなかったですしね」

可愛く小首を傾げる霧崎が何かを呟いたような気がしたが、アキラは聞こえないふりをした。

「あ、そうだ。お前、こいつ預かっといてくれよ。迷子みてえでさ」
そう言っって、先程からずっと二人を見つめていた少女をアキラが抱き上げた。

「よいしょ。ほら、こいつ……」

アキラが霧崎に向き直る。

「……」

しかし、既にその空間に彼女はいなかった。

「……あの野郎……」

怒りに震えながら、アキラは縮地法を使いこなすナースを呪った。

「……で、その子の親御さんを探していたら遅れた……と」

「ああ。しかも、そのクソ親がわけの分からねえ事を言っって俺にキレ始めてな。クソババアが来なかったらてめえの仕事が増えてた所だ」

未だ怒りに震える拳を握り締めながらアキラが言った。その姿を見て、目の前に座る長髪の男――ドクターが笑った。

「そうならなくて良かったです。これ以上忙しくなるのは御免ですからね」

「ああ。ただ、あのクソババアだけは許せねえ。ギリギリまでシカト決め込みやがって」

「霧崎さんは貴女が元気にしているのが嬉しいんですよ」

「ただ俺を困らせてえだけだろ」

口を尖らせるアキラに苦笑しながら、ドクターは机の書類を開いた。

「さて、血液検査の結果ですが、異常は特にありませんでした。いつものお薬を二週間分出しておきますので、これまで通り飲んで下さい。あと、血糖値が少々高くなっていましたので、少し甘い物を控えて下さい」

「ん。毎度悪いな」

「いえいえ。これが私の仕事ですから」

申し訳なさそうに頬を掻くアキラを見て、ドクターが笑った。人畜無害を絵にしたような笑みに釣られてアキラも笑う。が、すぐにその笑みを消してアキラがドクターを見つめた。

「ドクター」

「はい。お仕事の話ですね。パパッと話しちゃいましょう」

笑顔を消さずに、ドクターは懷から紙切れを取り出して素早くアキラの胸元に押し込んだ。

「……おい、ちょっと待て」

「そこにとある方の住所と名前が書いてあるので」

「今、何しやがった？ 言ってみろコラ。怒らねえから。ブツ飛ばすだけだから」

「その人を殺して下さい」

「聞けよ！」

アキラが怒鳴ると、ドクターは眉間に皺を寄せた。

「病院では静かに」

「あ、悪い……いや、違えよ！ 何でてめえは毎回胸に入れんだよ！？」

「だって落としたら危ないじゃないですか」

「ならポケットでいいだろうが！」

「まあまあ落ち着いて。……何度も何度も、同じ事を言わせないで下さいよ」

束ねた長髪の手を弄びながら、ドクターが今度は嘲るような笑みを浮かべた。その顔は先程までの優し気なイメージとはかけ離れており、まるで別人のようだった。

「いいですか？ 貴女も含め、患者は皆私の作品です。作品は皆須らく製作者である私に好きにされるべきです。生殺与奪、凡ゆる権利は私が持っています。私が自分の作品に何をしようと、文句を言われる筋合いはありません」

淡々と、しかし力強く語るドクターを前にして、アキラは背筋に悪寒を感じた。患者は作品。当然、自分もその中の一つ。ドクターの気まぐれ一つで自分の人生が決定される。単純な話ではあるが、少女を繋ぐには十分すぎる鎖だった。

「……そちらの彼も、私の患者です」

眉間に皺を寄せたドクターが、アキラの胸元を指差して呟いた。「胃袋の病気です。治療は胃薬で、あとは固形物の食事をしばらく控えるように言いました。しかし、その次の日です。私は霧崎さんから聞いてしまったんですよ」

ドクターの言葉に真剣味が増してくるが、アキラはつまらなそうに耳をほじくっていた。まるで、この後の話の展開を既に知っているかのように。

「彼……コンビニでおにぎりを買ってその場で食べていたそうです」
「……またその展開かよ」

アキラが深々と溜息を吐いた。

「信じられませんよね……」

「ああ、信じられねえよ。まさかまたそんな理由で人を殺すなんてな。どこぞの小学生探偵も大爆笑だ」

「たかが患者の分際で医者である私に逆らうなんて……」

「人の話聞いてくんね？ 聞き流してやるから聞いてくんね？」

「あ、報酬は後払いです。日時はイブキさんと相談して下さい」

「聞けよおとおお!!」

叫びながらアキラが机に拳を叩きつけた。鈍く響いた音を聞き、ドクターが眉をしかめた。

「病院で暴れないで下さい」

「てめえが話を聞かねえからだろうが!!」

「騒ぐのもやめて下さい」

頭を掻きながら叫ぶアキラを見て、ドクターが肩を竦めた。「言いたい事は分かりますよ。いくら患者が作品だからって、胸元に手を入れる行為はいささかセクハラが過ぎます」

「アキラのお仕事（裏）」 3

「はあ……」

薬の入ったバッグを片手で弄びながら、アキラは深く溜息を吐いた。その原因はもちろん、独善的な欲望に塗れたセクハラ医師である。二週間に一回の通院や採血などは自分の蒔いた種だと割り切っているが、セクハラだけは気に食わなかった。

警察に訴えれば彼をナースハーレムードクターによる病院の呼称である――から刑務所に入れる事もできるだろう。しかし、彼女はそれをしようとは思わない。イブキ達との関係上、警察とは関わるべきではないし、何より自分で殴る方が早いからだ。

アキラには法律がわからぬ。アキラは、街の家庭教師である。

オレンジジュースを飲み、不良で遊んで暮して来た。けれども――
「――セクハラに対しては、人一倍に敏感であった。……ってか？」

仕事で生徒に教えている文章の一節を改変して、アキラは楽し気に笑った。

「時間もあるし……こんな腹立つ日は不良『で』遊ぶのが一番だな」

アキラの視線の先には、だらし無く制服を着崩した金髪の少年達という、ある意味でテンプレートに忠実な不良達がいた。あまりに都合が良すぎるように思えない事も無いが、そんな細かい事を気にする程アキラは神経質ではない。その目は獲物を捉えた猛獣の如く。その口元は怪談に登場する真っ赤な服の女性の如く。アキラは既に、臨戦態勢をとっていた。

「なあ……そこのお前ら」

アキラの家は病院からは遠い地域にある。電車で揺られる事四十十分。更に徒歩で二十分。彼女は二週間に一回、必ずこの長距離を往復するのだ。

アキラがこんな面倒な事をわざわざ行う理由は一つ。通り魔のように学生を襲うのは病院のある地域のみと決めており、彼らが報復をしに家まで来る事を見越したからだ。家庭教師の仕事は自宅周辺の地域で行っているため、そこで学生と喧嘩――実際にはアキラが一方的に暴虐の限りを尽くしているだけなのだが――をしては、生徒や上司に目撃される可能性があるからだ。

断っておくが、目撃されて困るのはアキラではなく寧ろ目撃者の方である。見知らぬ人ならば問題は無いが、もしもそれがアキラの稼ぎに関わる人間だったら、口止めの為に暴行を受ける羽目となる。

しかし、自分に金を与える人を殴りつけるという行為は、アキラにとっても少々寝覚めが悪い――ここで『寝覚めが悪い』という言葉を用いた理由は言わずとも分かるだろう――行いだった。

そんな、暴虐の王とでも形容されるべき存在であるアキラは、今は真剣な目つきで電車で揺られていた。ホットパンツから伸びていた脚へ向けられるセクハラ紛いの視線を時折睨み返ししながら、アキラは分厚い本を読んでいた。タンクトップに肩掛けのバッグという胸を強調するような服装と端正な顔に、車内の男共の視線が集まる。しかし、ポケットの振動を感じてアキラの顔が心底不快気に歪むと、車内の空気は一変した。取り出した携帯には『非通知』の文字。小さく舌打ちをして、アキラは通話ボタンを押した。

「おかけになった電話番号は」

『現在進行形で使われてるぞ』

発信者はアキラの思った通り、ヘラヘラと笑う青年――イブキだった。

「俺、電車の中なんだけど？ 空気読めよ」

『なら、とっとと用件言うわ。今夜十時にマスターんここに集合で頼む。ちゃっちゃか片付けてえし』

「おい待て、てめえは詳細を知らねえだろ」

『臨機応変に対応するから、安心しろ。じゃ、アディオス』

イブキが言い終わると同時に電話が切れる。アキラは大きく舌打ちをし、目線を本に戻した。

「何見てんだよ」

自分に集まっていた視線を一掃する事も忘れずに。

「アキラのお仕事（裏）」 4

午後十時。マスターが『CLOSED』の札を立てると同時に、アキラが闇の中から現れた。

「よお、相変わらず寒そうな服着てんじゃねえか」

「あら、アキラちゃんがそれを言うの？」

子供のように笑うマスターが身に着けているのは、マリンブルのシンプルなドレスのみ。対してアキラが身に着けているのは、黒のタンクトップとホットパンツだった。

片や色違いだけで全く同じデザインの服を着回す者。片や全く同じ服を何着も買って着回す者。ファッションへの執着が薄い者同士、夜の闇の中で笑い合った。

「うふふ……さ、風邪を引いちゃう前に中に入りましょ。イブキちゃんも待ってるわ」

「ヒツヒツヒ……ああ、そうだな。イブキは別にいらねえけど」

マスターが扉を開ける。中に入ろうのしたアキラの視界に飛び込んだのは、カウンターに突っ伏して啜り泣くイブキの姿だった。

「……じゃ、またな」

「待ちなさい」

引き返そうとしたアキラの腕をマスターが掴む。その顔には、安堵に満ちた笑みが浮かんでいた。

「離せクソ野郎。俺は早く帰ってペットと夜を語り合わねえといけねえんだ。あいつ、本当に可愛いんだぜ？ ジュウシマツのスナギモチちゃんって名前なんだけどよ」

「語り合う相手ならここにいないじゃない。ていうか、さっきまで私が相手をしてたんだからそろそろ交代してちょうだい」

「それが本音かてめえ！」

結局アキラは抵抗虚しく店内へと引きずり込まれた。一つ置いて隣の席には啜り泣きながら何事かを呟いているイブキ。カウンターで

はマスターが晴れやかな表情で飲み物を準備していた。

「……ウツぜえ……」

心底不快気に言いながらアキラがポケットを探る。そして四つ折りの紙を一枚取り出し、カウンターに置いた。

「住所と名前はここに書いてある。都合の良い日は？」

「今日だ」

イブキが顔を上げて答えた。落ち込むような顔をしていたが、その頬に涙の跡は無い。

「今日？ もう夜中だぞ？ 家に入れってか」

「いや、出てくるまで待つ」

「出て来なかったら？」

「……家の灯りが消えたら、また明日って事で」

「無計画にも程があんだろ。自分探しの旅じゃねえんだぞ」

アキラが苛立ちながらイブキを窘める。されど、イブキは全く堪える様子も無くただ深く溜息を吐いた。

「二股がバレちまってよお……思いつきりビンタされちまったよ……」

「聞いてねえよ」

「だから明日はひたすら女漁りしてえんだよ……早く新しい彼女を作らねえとエネルギー切れで死ぬ」

「うん。もう、死ぬよ。二股どころか八股にでも引き裂いてやるよ」

「顔が腫れて力が出ねえ……」

「いっそ、この世からバイバイキンしてくれ」

アキラの冷たい返答に力無く笑いながら、イブキがカウンターにナイフを置いた。ほぼ同時にマスターがオレンジジュースを置いたが、アキラはナイフの方を手を取った。

「またこれか。俺、一度でいいから拳銃を撃ってみてえんだよな」

「やめとけ。カッコつけて片手撃ちして腕痛めるのがオチだ。それに……美人に硝煙は似合わねえ」

「キモッ」

キメ顔と共に放った台詞は、無情なる一言によって呆気なく一蹴されてしまった。

「でも、確かにそうだな。俺、腕力無えし。ナイフはサクツとヤレるからお手軽だな」

ナイフを片手で器用に弄び、やがてアキラはそれをポケットにしまった。その姿を見て、イブキが小さく口笛を吹く。アキラは満足そうに笑い、オレンジジュースを飲み干した。

「……うし。イブキ、さっさと行こうぜ」

「おう」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

返事の代わりにサムズアップをして、アキラは扉を開けた。

「あれか……」

街灯にもたれかかりながら、アキラが遠くのアパートを指差した。「古井戸」から徒歩数分の距離だった。

「で？　ここで灯りが消えるまで待ってっか？」

アキラは振り返り、少し離れた位置にいるイブキに聞いた。イブキは煙草を吸いながらターゲットの部屋を見詰めていた。

「……ま、そうなるな」

「マジかよ……さすがにこの格好は冷えるぞ」

「背広いるか？」

「いや、いい。てめえに借りを作りたか無えし」

「ハッ、風邪ひいても知らねえからな。……まあ、家が都合良く近くにあったわけだし、案外都合良くすぐに出てくるんじゃないか？」

「ヒッヒッヒ。さすがにそんな都合良くはいかねえだろ」

「あ、都合良く出てきた」

「マジかよ。都合が良いじゃねえか」

二人の視線の先。古めかしいアパートの入口から娘と思われる子供を連れた若い男が出てきた。黒髪で純朴そうな少女と違い、男

は茶髪に鼻ピアスという、不誠実な雰囲気格好だった。その二人の姿を見て、イブキが肩を竦める。

「おいおい、随分若いじゃねえか。もっと俺みたいに計画性を持って女と付き合っしてほしいね」

「知るか。つーか、あいつ病院で会ったんだけど？　あのクソガキも一緒かよ」

「マジか。一応言っとくが、私情は挟むなよ」

「たりめーだ。何年この仕事やってると思ってやがる」

「まだ二ヶ月目だ、アホ」

そんな二人のやり取りを他所に、親子は夜中の街を歩いていく。手荷物は無く、遠出をするようには見えなかった。親子のはずだが手は繋いでおらず、少女は時折小走りで父の側に寄っていた。

そして、親子から少し離れた距離を保ちながら、夜の闇に紛れるような服装の二人。アキラは片手をポケットに忍ばせながら歩き、少し距離を置いたイブキが携帯を弄りながら歩いていた。距離を置いているのは、アキラが煙草の煙を嫌うためだ。

「……で？　どうやって二人を引っぺがすんですか、イブキ君？」

「んー、どうすつか。さすがに都合良く別れちゃくれねえだろ。ま、いざとなったら二人共バイバイキンしてもらうか」

「ガキをヤルのは心が痛むんだけど？」

「ならアキラが考えてくれ。こっちは情報残しちゃんらねえんだ。死体も回収しなきゃならねえ。やり方も限られるさ」

無情なイブキの言葉に、アキラは軽く舌打ちをした。そしてポケットから抜いた右手をこめかみに当て、何事かを考え始めた。

「……イブキ。あのガキの名前分かるか？」

「名前？　一応、知ってるが？」

「教えてくれ」

「五核ごかくちゃんだ。『五つの核』で、五核ちゃん」

「……」

アキラは心底不快気な顔でイブキを睨んだ。

「俺、真面目な話してんだけど？」

「ジョークであってほしいのは俺も同じだ」

「……クソガキも殺してやった方が幸せじゃねえか？」

「改名って手があるだろ。てか、死体増やしたらドクターにどやされんぞ」

「でも、五核は無えだろ……百歩譲って読み仮名はいいとしてもよ……『五つの核』って、どこのラスボスだよ」

「頭と手足に一個ずつ核があるわけか」

「ああ。で、核を一個壊しても他の核の力で再生される」

「手足と頭の核を同時にブチ抜かねえと倒せねえのか」

「そうだ。しかも、ヒットポイントが高いから一度再生されたらその核だけをしばらく攻撃しなきゃならねえ。その間、他の核が回復魔法でお互いを回復させるからそのバランスも考えながら攻撃しねえとジリ貧に……」

「あ、別れたぞ」

「聞けよ。ちょっと恥ずかしくなってきたじゃねえか」

二人が馬鹿な事を言い合っている間に、親子は二十四時間営業の酒屋の前で別れていた。父親が店内に入り、娘の五核が外で待たされている。

「よし。じゃあ、俺がクソガキを近くの公園まで連れて行くから、イブキは父親が出てきてから公園まで来てくれ」

「できんのか？」

「余裕」

多少不安気に聞こえるイブキの言葉に、アキラはサムズアップと共に返した。

「五核」

暗闇の中、自分の姿がシルエットとして浮かび上がるような位置に立ち、アキラは五核を呼んだ。ほぼ同時に、先程から手持ち無

沙汰にしていた五核が振り返った。

「……ママ！」

「おいで、五核」

アキラが背を向けて走り出す。それをそれを見て、五核も慌てて走り出した。

「……今日は随分都合がいいねえ」

新たな煙草に火を点けながら、イブキが呟く。その視線は、酒屋の入口に注がれていた。

「……そろそろか」

アキラ達が公園に着くタイミングを計り、イブキは店前で困惑している男に向かって行った。

「どうかしましたか？」

イブキが話しかけると、男が苛立ちながら振り返った。近くで見るとピアス塗れの醜い顔が際立っており、イブキは危うく顔をしかめる所だった。

「いや、うちの娘がどっか行っちゃったみたいなんスよねえ……」

――他人事みてえな言い方してんじゃねえっての。

「……小さな女の子でしたら、先程公園に走って行くのを見かけましたけど？」

心の中の言葉はおくびにも出さず、イブキは友好的な笑顔で言った。

「マジすか！？ あんがとございます！」

ビール片手に走っていく後姿に向けて、イブキは唾を吐いた。

「……」

公園の暗闇に身を潜めるように、アキラは立っていた。少し離れたベンチには、当て身で気絶させた少女が倒れている。

「……これ、そもそもおにぎりが発端なんだよな」

固形物の食事を控えるように言ったにも関わらずおにぎりを食

べた患者。よく考えたら、先程酒まで買っていた患者。そんな患者を殺してくれというのが、今回のドクターの依頼だった。

「……ヤバイ。モチベーション下がりそう」

殺害理由のあまりの下らなさにアキラが改めて脱力した瞬間、公園の入口から何者かが走ってきた。背丈と髪型から察するに、今回のターゲットだろう。アキラはポケットからナイフを取り出し、男に気づかれぬように近寄り始めた。

「……五核？」

ベンチに倒れている少女に向かって男が歩み寄る。実に仰々しい字面ではあるが、男が呼んでいるのはあくまで『ココア』である。少女に目を覚まされたら厄介になる。そうなる前に、背後に回ったアキラは男の肩を掴んだ。

「よお、クソツタレ」

男が反射的に振り向く力を利用して、アキラが握り締めた拳で下顎を打ち抜いた。その恐ろしく正確なパンチは、男の意識を奪うには十分すぎる程だった。

「うわ……こんなに早く終わっていいのかよ。高い金貰ってんだぞ？」

あまりの呆気なさに肩透かしを食らいながら、アキラはナイフを男の首に当てた。

「じゃ、バイバイキーン」

「早かったな」

数分後、公園に着いたワゴン車に死体を載せながらイブキが言った。また、彼の他に数人の黒服の男が痕跡を念入りに消していた。「まあな。そいつの核は一個だけだったしな」

イブキにナイフを投げて返し、アキラが言った。その傍には、未だ気絶したままの少女が倒れている。

「それよりイブキ、このクソガキはどうする？」

「あん？ ほっといても死にやしねえだろ。……じゃ、俺はドクターにこいつを届けてくつから」

イブキがワゴン車の助手席に乗り込み、窓から顔を出した。他の黒服の男達も、続々とワゴン車へ入っていく。

「ん。またな、イブキ」

「ああ。……あ、そうだ」

イブキが何事かを思い出したようにアキラに向き直った。ほぼ同時に、静かなエンジン音が響き出す。

「今回はかなり楽な仕事だったから、ドクターからの報酬は俺から断つとくわ」

「……は？」

茫然とするアキラに構わず、ワゴン車が発進した。

「アディオス！」

イブキが車の窓を閉める。その瞬間、アキラは全てを理解した。「待てコラアアアア！」

夜の街中に、全速力で走るアキラの怒鳴り声が響いた。

「アキラのお仕事（表）」 1

平日の夕方。仄かに暖かい陽光に照らされながら、スーツを着た女性が歩いていた。灰色の背広と同色のパンツに、片手には黒の鞆といった黒ずくめの格好。背中で括った黒髪を揺らしながら、その女性は歩いていった。

擦れ違う者が息を呑む程の美貌。そして、抜群とも言えるプロポーションを持った女性は――

「何見てんだコラ」

まだ成人すら迎えていない暴力少女、アキラであった。

自分に対し舐め回すような視線を向けていた男を睨みつけ、アキラは小さく舌打ちをする。本来ならばもっと目に見えて苛立つのだが、スーツを着ているときは自分を抑えるようにアキラは努めていた。

「ふう……夕陽が眩しいぜ」

「そうですねえ」

突然の背後からの声を聞くと同時に、アキラは反射的に振り向きながら拳を振るう。しかしその拳は瞬時に声の主によって掴まれ、呆気なく無力化された。

「中々刺激的な挨拶ですね、アキラさん？」

「……クソババァーああああ!!」

アキラが言い終わる前に、その拳が異常な握力によって締め付けられた。アキラは悲鳴をあげながら鞆を投げ捨て相手の手首を掴むが、締め付けは緩むどころかきつくなくなるばかりだった。

「……何か言おうとしましたか？」

「言ってねえ! 言ってねえから離せ!! 離してクダサイ霧崎サ
ンンンン!!」

どこかぎこちない敬語で必死に謝罪をして、やっとアキラの拳は解放された。どれ程の握力で締め付けられたのだろうか、その拳

は小刻みに震え、思い通りに動かなかった。

「……いってえ」

「うふふ、お元気そうで何よりです」

「手が開かねえんだけど？　どうな馬鹿力だコラ」

「そんなに強くはないですよ？　炭酸入りの缶ジュースを縦に握り潰せる程度ですし」

「どこが強くなえんだよ。プレス機との共同生活でも送ってたのか」

小首を傾げて笑う霧崎をアキラが睨みつける。普段のナース服ではなく花柄をあしらったワンピースを着た霧崎は、いつもより若々しく見えた。

「実際若いんですけどね」

「誰に話しかけてんだよ……てか、お前いつから俺の後ろにいやがつたんだ？」

「『待てコラアアアア！』からですね」

「おい、それ昨日の夜じゃねえか。守護霊気取りか？　道理で最近金縛りに合わねえわけだ」

「たかがワゴン車に追いつけないなんて、まだまだですね」

「ネグロイドに頼んでくれ。てか、そこまで見てやがったのかコラ」

「あ、昨日の患者さんの家、あそこですよ」

「何で病院関係者は人の話を聞かねえんだよ……」

深々と溜息を吐きながらも、アキラは霧崎の視線を追う。古ぼけたアパートと、その前に停車したパトカーが目に入った。

「『行方不明』らしいですよ。さすがはイブキさんですね」

「けっ、俺には関係無え」

「それ、本心から言ってるなら尊敬しますね」

楽し気に笑いながら、霧崎はポケットから煙草を取り出し、口に咥えた。童顔な彼女が煙草に火を点ける姿はあまりにミスマッチだ。

「あ、悪い。俺、煙草の臭いが苦手なんだよ。ちょっと離れて吸ってくんねえか？」

「ふうー……」

「人の話を……ん？　これ、なんか甘くねえか？」

「チョコフレバーですから。普通の煙草の臭いは子供が嫌がるんです」

「なら、初めから吸わなきゃいいだろうが」

「硝煙の臭いも、子供は嫌がるんですよ？」

霧崎はニツコリと笑いながら言った。しかし、アキラはどこか腹立たし気に舌打ちをした。

「……で、アキラさんは何でコスプレなんてしてるんですか？」

「こんな分かりにくいコスプレがあるか。バイトだよバイト」

眉間に皺を寄せながら答えるも、アキラは心の中では安堵していた。霧崎が自分の気持ちを察して話題を変えた事に気づいたからだ。

「家庭教師でしたっけ？　生徒を殴っちゃダメですよ」

「何でてめえら全員同じ事を言うんだよ。弁えてるっての」

「だって、アキラさん怒りっぽいじゃないですか」

「俺が怒りっぽいんじゃないやねえ。周りに俺を怒らせる奴が多いだけだ」

「物は言いようですね」

「うるせえ。……まあ、正直今日の生徒はかなり厄介だから手が出るかもしれねえ」

「厄介？　問題児って事ですか？　不良が不良を更生してどうするんですか？」

「誰が不良だコラ。それに、あいつも別に不良じゃねえ。ただ、何と言うか……」

生徒に気を遣っているのか、言い難そうな顔でアキラは頭を掻いた。その動作から、その生徒もまた自分達と同じ異常者である事を霧崎は察した。

「ほら、たまにいろんないろんな自分を特別な存在だと思ひ込む思春期のガキ。わけの分からねえ事を突然言い出したり」

「ああ、『中二病』ってやつですね。若い患者さんでたまにいます

よ、『先生……僕、死んじゃうんですか?』とかいきなり言い出す人。ただの捻挫なのに」

「ああ。まあ、そんな感じ……か?」

煮え切らない態度のアキラを、霧崎は怪訝そうに見詰めた。

「アキラさんにしては珍しいですね。いつもはもっとはっきり言うのに」

「ああ。あいつはよく分からねえんだよ。中二病なのは確かだけだな」

「でも、手が出そうなくらい厄介なんですよね?」

「そうだ。イブキとはまた別ベクトルに面倒だな」

「へえ……ちょっと見てみたい気もしますね」

「やめとけ。懐かれるぞ」

「……?」

霧崎は再び怪訝そうな顔をする。アキラの『懐かれるぞ』という言葉に否定的な意味が混ざっているのは理解できたが、何故彼女がそのような事を言ったのか、霧崎には理解できなかった。

「そろそろ着くが、てめえは着いてくんなよ?」

「んー、仕方ないですねえ。ちよつと興味ありますが、今日は帰りますね」

言い終わると同時に、霧崎は煙草の煙をアキラの顔に向けて吐き出す。そして、突然の行動にアキラが驚き、目を閉じて咳き込んでいる間に霧崎はその場から消失した。

「あのクソババア……」

虚空に向けて悪態をつき、アキラは生徒の家に向けて歩き始めた。

「アキラのお仕事（表）」 2

黒と赤を基調とした部屋。赤の壁紙と黒のカーテン。赤の天井と黒の床。そして、それらに描かれた白の魔法陣。その量は多く、されど一つも重ならないように緻密に描かれていた。

その部屋の端に、茶色の椅子に胡座をかいている少女が一人。魔法陣が描かれた白い紙が大量に貼り付けられた、黒と赤のゴシックロリィタの服。紺色のショートヘアの上には、赤のカチューシャが乗っていた。半開きの眼は忙しく動き、半開きの口元は荒い息をたてながら、時折痙攣するように上がったたり下がったりしていた。ふと、少女の顔面運動が止まる。そして数秒間の硬直の後、口角が吊り上がり、目尻が下がった。

「来たッス。来たッス。五時。時間ピッタリッス。ウイヒヒヒヒ」
生き生きとした表情で少女が笑う。その狂ったような笑い声が治まると同時に、家のチャイムが鳴った。

「ハイハイ！ 今行くッスよー！ー！！」
嬉々として叫び、少女は魔法陣を踏みながら部屋から飛び出し、そして盛大に階段から転げ落ちた。

「わっ！ んぎゃ！ あひっ！ ウイヒ！ ひぎっ！」

珍妙な悲鳴をあげながら、少女は玄関先に落ちた。服に貼り付けた魔法陣は何枚か破れ落ち、当人は額と鼻からダラダラと血を流している。

「ウイヒ。痛いッス。やっちゃったッス。ウイヒヒヒヒ！」

明らかに深手を負っているというのに、少女は痛がる様子を見せずに笑い続けていた。そして床に落ちた魔法陣で血を拭きながら扉を開いた。

「お待ちせしましたッス」

「うゝっす。……って、何だその怪我？ 剣山相手にヘッドバンギングでもかましたのか？」

扉の前に立っていたのは、スーツ姿の女性、アキラだった。彼女は血塗れの少女を見て一瞬固まったが、すぐに平静を取り戻した。そんなアキラとは対照的に、少女は興奮した様子で血を拭きながら笑い続けていた。

「ウィヒヒ！ ちょっと階段から落ちただけッス！ 心配無いッス！」
「いや、『ちよっと』の流血じゃねえだろ。プロレスラーもドン引きするわ」

「ウィヒヒヒヒ！ 本当に平気ッス！ 全然、平気……ッスから……バタリ」

自分で効果音を言っただけ少女が倒れる。しかし、アキラはその様子を見て焦る事無く深い溜息を吐いた。倒れていながらも、少女は玄関に血を広げないように傷口と鼻を押さえていた。

「……救急車呼ぶか？」

「嫌ッス。自分で処置できますから」

「頭割れてたらどうすんだよ。生徒が脳味噌垂らしながら死ぬのは見たくねえぞ」

「ヤバかったら自分で分かるッス。それに、病院嫌いですし」

一転、真面目なトーンになった少女は傷を押さえながら立ち上がり、ゆっくり階段を上って行った。アキラも肩を竦めてそれに続く。階段に散らばった魔法陣を律儀に拾いながら。

この少女こそ、アキラをして『かなり厄介』と言わしめる生徒、マリである。部屋に魔法陣。服にも魔法陣。奇怪な発言に奇怪な行動。理解や分析を一切許さぬ人間。

「――そして、それらを補って余りある程の美貌」

「一人で何を呟いてんだ」

「ウィヒヒヒヒ！ 何でも無いッスよ」

元の調子に戻ったマリは、机から取り出した救急箱で手際良く傷口を塞いでいた。アキラは異様な部屋の模様に驚く事無く、魔法陣が描かれた座布団に胡座をかいた。

「椅子どうぞッス」

「ん、悪いな」

「オレンジジュース」

「『スッス』って何だよ」

「辞職願ッス」

「おう、書く手間が省けたぜ。締め上げるぞコラ」

マリお手製の辞職願はゴミ箱へ投げ捨てられた。少し苛立った自分を抑えるようにアキラはオレンジジュースを飲む。マリはの間も笑いながら机を動かし、二人向かい合って座った。

「うし。じゃあ、始めっぞ」

「あ、人生ゲームやらないッスか？」

「やらねえ。今の人生で精一杯だ。そしてちよつと黙れ」

マリが軽く舌打ちをする。聞こえないふりをして、アキラは鞆から眼鏡とクリアファイルを取り出した。ちなみに、眼鏡には度が入っていない。

「今日はいいつを使う。二十分で解け」

机の上に冊子が置かれる。その表紙には、『アキラ式全科目一斉テスト』とボールペンで書かれていた。手に取ったマリがすかさずページをパラパラと捲る。

「おお、スゴいッスね。メロスの隣に二次式があるッス。しかも、全部手書きッスか。うわ、世界地図まで……」

「ああ、パソコンもコピー機も無えからよ」

冊子には、印字と比べても遜色無い程丁寧な字がボールペンで書かれていた。世界地図や国語の文章も全て手書きだが、修正液を使われた様子は無い。

「よし、始めろ」

掛け声と同時に、アキラは懷中時計を机に置いた。

「アキラのお仕事（表）」 3

懐中時計の秒針が回る。規則正しく時を刻んでいるそれを、アキラは物憂げに見つめていた。オレンジ色のグラスに映る像。歪んだ時計の像を拒むように、何度もグラスを手に取りながら。

前を見ると、荒い呼吸や激しい眼球運動と口角の上下運動を繰り返す少女。問題文が読めるかどうか怪しいが、その右手はしっかりと解答を記しているようだった。

オレンジジュースの味を何度も確かめている内に、グラスは空になってしまった。現実から浮遊しそうな甘味と、それを強引に引き戻す苦味。アキラが好むその味は、喉を通る橙色の液体からは感じられなかった。

気を紛らわすかのように、アキラは再び前を見る。時が止まっているかのように、凡ゆる運動を停止した少女。その、問題を解き終わったという証に苦笑して、アキラは懐中時計を見た。制限時間まであと三分。しかし、その百八十秒を満喫するつもりは、アキラには無かった。

「止め」

「ウィヒヒ！ 丁度ツスね」

マリの気楽な笑い声を聞くと同時に、喉の奥から甘味と苦味がゆっくりと染み出してくる。懐中時計を閉じながら、アキラは優しく笑った。

「三分余ってたぞ。随分早いじゃねえか」

「ウィヒヒヒヒ！ マリは天才ツスから！」

「そうか。それは頼もしいな」

アキラがテストの冊子をパラパラと捲る。その瞬間、先程までの優しい気な表情が修羅の如く歪んでいった。

「……一応聞いておくが」

「はい？」

「真面目に解いたんだろうなあ？」

「真剣そのものツスよ。どんなにおかしな解答でも、真面目に書いているのは間違い無いツス」

「……そうか。じゃあ、一つ間違える度にデコピンな」

「え！？ そ、それは困るツス……」

「あん？」

「い、いえ、何でも無いツス！ ウィヒヒ！」

狼狽え始めたマリを、アキラは冷え切った目で見つめる。取り繕うように笑う生徒の頬を、滝のような汗が流れていた。

「……まず、第一問。元素の周期表を第四周期まで書け」

『Fl・Y・To・He・Ve・N』

「てめえがな」

「痛いツス！」

「ちなみにこの中で実際に存在する元素はYのイットリウム、Heのヘリウム、Nの窒素だけだ。FlとToとVeは存在しねえ。ちなみにこの三つの中で第四周期までに入っているのはヘリウムと窒素だけだ」

「んな事分かってるツスよ。今更何言ってるんスか？」

「……第二問。次の式を因数分解せよ」

『 $(x + X)(x - III)$ 』

「正解だが、アラビア数字しか認めねえ」

「あうっ！」

「数学はローマ数字って事を除けば全部正解みてえだな」

「当たり前ツスよ。マリを馬鹿にしてるんスか？」

「……次。漢字の読みを答えよ」

『邪智暴虐——あきら』

「……」

「ぎっ、ぎゃあああああああ！！」

「他は真面目か。まあ、記号問題ばっかだしな」

「ギブ！ ギブツス！ 死ぬツス！ ひぎいいいい！！」

悲鳴を煩わしく感じて、アキラは手を放す。しかし、その顔から怒りは微塵も消えてはいなかった。

「てめえ、俺を舐めてんだろ？　なあ、舐めてんだろコラ」

「イチチ……舐めてなんか無いッスよ。頭おかしいんスか？」

「てめえに言われたか無えんだよコラ」

ドスを効かせた声で凄みながら、アキラはマリを睨みつけた。

そして頃合いを見たかのように、マリは舌を出してウインクをした。
「冗談ッス。簡単な問題ばかりだったんで、ちよいとふざけただけッスよ。ウイヒヒ」

「『ちよつと』で済むジョークじゃねえだろ。特に最後」

「ウイヒヒヒヒ！　珍解答を考えてたら無駄に時間がかかったやつッスよ」

「その割にはあまり面白くねえな。ボケが浅い」

「ダメ出し!？」

「周期表の問題だが、もっと練れば実在する元素だけで英文が作れたはずだ。例えば……そうだな。『S・Ta・Y・W・I・Th・Y・O・U』とか。Yが被ってるし適当な文だがな」

「頭の回転速すぎるッス。てか、お笑い指南はいら無いんスけど」

「ちなみに、俺は中学時代に『F・U・C・K・Y・O・U』って書いて退学の危機に瀕した事があるぞ」

「体張り過ぎッスよ」

「まあとにかく、ボケるならもっと上手くやれってこった。ヒッヒッヒ」

ケラケラと笑いながらアキラは冊子を捲る。そしてわざとらしく眼鏡の位置を直すと、今度は真剣な表情でマリに向き直った。マリの眼球はゆっくりと眼窩を転がっており、話を聞く人間の態度とはかけ離れていた。

「真面目にやれば満点取れたな？」

「当然ッス」

「高校受験はするな？」

「イエッス」

「志望校は？」

「十六夜学園ッス」

「……スマン、よく聞こえなかった。もう一度言ってみろ」

「十六夜学園ッスよ」

変わらぬマリの返答を聞き、アキラは肩を落とした。深々と吐いた溜息やどこか蔑むような視線が、アキラの心情を物語っていた。マリの眼球が動きを止め、はっきりとアキラを捉える。その顔には、怪訝そうな色が浮かんでいた。

「お前じゃ無理だ。諦めろ」

ニヤニヤと笑いながら、見下すようにアキラは言った。それは教師の取る態度とは到底思えず、マリの額にも青筋が浮かんだ。

「……まだ分からないじゃねえッスか」

「いや分かる。絶対無理だ」

「成績も良いし、真面目に勉強もしてるんスけど？」

「ああ、知ってる。でも無理だ」

「……何でそう言い切れるんスカあ？」

「いや、だってお前……」

笑いを噛み殺しながら、アキラはマリの紺色の頭を指差した。

「あの学校、染髪禁止だし」

「……へ！？」

染髪禁止。その事実には驚愕した瞬間、マリの両眼が勢い良く飛び出し、机に落ちる前に素早く伸びた腕がそれらを掴み、再び自分の眼窩に嵌め込んだ。

「……は？」

今の数瞬の間に何が起きたのか、アキラには把握できなかった。

「……どういう事ッスか？」

「こっちのセリフだああああ！！」

アキラが怒鳴る。その顔は恐怖に染まり、両の拳はガクガクと震えていた。

「のわっ！ な、なんスか！？」

「『なんスか』じゃねえよ！ てめえ、今目ん玉外れたろうが！」

「はい？」

「いや、だから目ん玉が……」

「はい？」

「目ん玉外れて……」

「はい？」

「……うん、もういい。もういいわ」

アキラは頭を抱え、先程の光景を必死で忘れようとした。マリの眼球はゆったりと眼窩に転がっていた。

「で、何で染髪禁止なんスか？」

「いや、どこの学校も染髪は禁止だと思うんだが……てか、お前のその髪は注意されねえのか？」

「黒にするようには言われてるツスけど、注意はされてないツス」

「いや、それ注意だから。清々しい程の現実逃避だな、オイ」

赤いカチューシャが乗った紺色の髪は、マリの服装も合わさって神秘的な雰囲気醸し出していた。赤と黒という配色の中に唯一配置された紺。その力強い存在感は、見る者を皆圧倒する程だ。

「てか、あの学校は金かかるぞ？ 全寮制だし、授業料も制服も食費もかなり高え。あと、生活指導のクソババアもウゼえ。華道の教師なんだが、敬語を使わねえと剣山で殴られる」

「訴えたら勝てるツスね。というか、随分詳しいんスね」

「卒業生だからな」

「ああ、卒業……はあああ？」

今度は、マリが蔑むように笑った。先程の自分を真似て深い溜息を吐く姿を見て、アキラは舌打ちをした。

「喧嘩売ってんのかコラ」

「いや、だってそんな事を言う人があのお嬢様学校を卒業してるとは思えないツスから」

「お嬢様学校？ あそこはそんな所じゃねえぞ？」

教師の圧力に

屈して表向きは礼儀正しい奴が多いだけだ。皆、腹の中は真っ黒だ。闇討ちにも会うしな」

「最後おかしいッスよ」

「おかしくねえよ。成績より力が重要視される世界だからな。闇討ちに会うような未熟者が悪い」

「いや、戦時中じゃないんスから」

「本当だぜ？　それも十六夜の校風だしな」

「校風？」

目を丸くするマリを、アキラがじとりと湿った視線で睨みつけた。訝しむような光が、レンズの奥から差している。

「お前……まさか、十六夜学園の名前しか知らねえんじゃねえだろうな？」

「ギクリ」

擬音での返事に、アキラは深い溜息で返した。額には皺が刻まれ、拳は細かく震えている。

「……分かった。じゃあ、今から十六夜学園の事を教えてやる」

待ってましたと言わんばかりに目を輝かせるマリ。そんな生徒とは対照的に、アキラは何か嫌な事を思い出したのか、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「アキラのお仕事（表）」 4

強く、謙虚に、美しく。それが十六夜学園の校風である。この学園は、中等部と高等部、それぞれ約五百名の生徒が在籍する中高一貫校だ。

「ストップ」

「オーケー。ワンストップ」

「高校から入学する人は何人スか？」

「大体四十人だ。ちなみに、成績がトップだと学費免除な」
「ワオ」

生徒は全員、二人部屋の寮で生活する。相部屋する二人は学年毎に無作為に選ばれ、その後卒業するまで生活を共にする。もしも片方の生徒が退学、除籍等の措置を下されば場合、残りの生徒は連帯責任という事でその後一人で生活する事になる。

また、風紀の乱れを防ぐ為に、生徒は化粧品や洋服の持ち込みを禁じられる。もちろん、ゲームや娯楽の類も、麻雀と格闘ゲーム以外は全て禁止である。

「ストップ」

「オーケー。トゥーストップ」

「何で麻雀と格ゲーは許されるんスか？」

「相部屋になった相手との競争心が生まれて、向上心が高まるからだ」

「それ、理想論ッスよね？」

「ああ。でも、実際にそれを許可してから生徒の成績や学習意欲が上がったって話もあるぞ」

「まあ、適度に休息は必要ッスからね」

そしてこの学園の最大の特徴は文武両道の精神にある。『文』も『武』も極める為に、在校生はそれぞれ一種類の科目を受講しなければならぬ。『文』からは書道、華道、茶道の三つ。『武』からは柔道、剣道、弓道、空手道、合気道、少林寺拳法、忍道、居合道、ジークンドー截拳道、テコンドー? 拳道の十個から、生徒は一つずつ専攻するのだ。

「ストップ!」

「オーケー。スリーストップ。ワンナウト」

「武道が多すぎるッス! てか、ワンナウトて何スか!？」

「まあ、校風のメインが『強く』だからな。選択肢が多いと誰もが自分に合った強さを得る事ができるわけだ。あと、それに突っ込んだらお前の『ストップ』にも突っ込まねえといけねえぞ?」

「ぐぬぬ」

そして、それらの規則によって鍛えられた生徒が力を競い合う行事が、年に三度行われる。体育祭、文化祭、生徒会長選挙である。

「ストップ!」

「ノーストップ。ゴーアヘッド」

「くっ……!」

体育祭では『武』を、文化祭では『文』を披露するのだが、こ

れら二つは文字通り単なるお祭りに過ぎない。生徒達の実力が真に計られるのは、他でも無い生徒会長選挙だ。

まず、十六夜学園の生徒会長は中高で分かれていない。全六学年の生徒の中から、たった一人の生徒が学園の象徴として置かれるのだ。

そして、その象徴を決める生徒会長選挙。この選挙に立候補する為には、ある条件を満たさなければならない。

それは、五月に行われる実力テストで八割以上の点数を取り、且つ授業態度等の教師からの評定が八割を越えている事。この時点で、『文武両道』の『文』が試されるのだ。

そして、それらの試練を突破して選挙に立候補した生徒には、六月末に新たな試練が与えられる。これこそが十六夜学園生徒会長選挙の目玉。『武』を試される試練である。

「まあ、こんな仰々しい言い方はしてるが、要するにトーナメント式の喧嘩だな。早朝に対戦相手の名札が渡されるから、その日の内に相手が持つてる自分の名札を奪って教師に渡せば勝ち。勝負がつかなかったら両者脱落。それを一週間程繰り返して、残った一人が生徒会長ってわけだ」

「現実と虚構の区別くらいしてほしいツスね。どこのバトル漫画の世界ツスカ」

「残念ながら現実だ。あと、お前にだけは言われたくねえ」

アキラが部屋を見回す。刺激的な色の壁には、大量の魔法陣が所狭しと描かれていた。向かいに座る少女の服にも同様の紙が貼られている。

「現実の虚構の区別くらいできてるツスよ」

アキラの気持ちを察したように、マリはそう吐き捨てた。口を尖らせるその姿からは、年相応の幼さが感じられた。

「……そうかよ」

アキラも棘のある口調で返した。しかし、その目元は柔らかく、少女を見守っていた。その視線をマリはむず痒く感じたようで、居心地悪そうに身を振らせた。そんな姿がまた愛らしく、アキラはそっと少女に手を伸ばし、カチューシャごとその頭を撫でた。額に貼られた絆創膏には、薄っすらと血が滲んでいた。

「まあ、好きに生きろよ」

「……言われなくてもやってるッスよ」

怒ったようにマリはその手を払いのける。撫でられ慣れていない猫のように、居心地悪そうな面持ちで少女はアキラを睨んでいた。「……で？ 志望校はどうする？」

「変えるッス。家から通える所がいいッスから」

「そうか。まあ、ゆっくり決めろよ。お前はまだ時間があるからな」
そう言うアキラの表情はどこか寂し気だった。物憂げに伏せた瞳からは、何かしらの、彼女の心を覆い尽くす物が感じられた。

そんな教師の顔を見たマリの眼球が、ゆっくりと非常識な回転を始める。三秒程かけて一回転したその瞳は、鏡のようにはっきりとアキラの姿が映っていた。

「後悔してるんスか？」

「……何をだ？」

「十六夜学園に入った事ッス」

後悔しているのか。そんなマリの言葉が、アキラには、その瞳の中にいる、反転した自分に言われたように思えた。

「何でそう思う？」

絞り出すようにして出した言葉を受け、反転した自分が醜悪な笑みを浮かべた。その笑顔の、あまりの醜さに目を逸らそうとしても、反転した彼女はそれを許さなかった。心を覗き込むかのように、鏡像は笑いながらアキラを見つめていた。

数秒の硬直の後、マリの瞳に色が戻った。鏡像が消えた事に安堵すると同時に、アキラは自分が笑っている事に気付いた。反転した自分が浮かべていたのと、全く同じ笑いだった。

「十六夜学園の下りから元気が無いッスから。嫌な思い出でもあるんスか？」

マリが、ビー玉のように透き通った瞳でアキラの顔を覗き込んだ。アキラは、一度深く細い溜息を吐き、少女から目を逸らした。「何も無えよ。授業時間が潰れるからブルーになっただけだ。続きやるぞ」

鞆から教材を取り出し、アキラは机に置いた。ふと、下腹部に熱さにも似た違和感が生まれ、アキラはそこを撫でた。

「……っ！」

「ん？ どしたんスか？」

「いや、何でも無え」

表情には出さなかったが、アキラは下腹部に触れた瞬間、焼けるような痛みが全身に走るのを感じていた。

空に星々が散り始めた頃。アキラはマリに見送られて家を後にした。軽く溜息を吐きながら、髪を括ったゴムを解き、背広のボタンを二つ外す。それだけで、アキラは充足感にも似た開放感を得る事ができた。

「……星が綺麗だな」

「そうですねえ」

アキラは、今度は驚かなかった。まるで初めから霧崎がそこにいたのを知っていたかのような口調だった。霧崎は、そんなアキラの様子にも全く動じずに笑っていた。ワンピースに散りばめられた花柄が、空に落とされた星のように煌めいている。

「……霧崎」

「はい？」

「晩飯、付き合ってくんね？」

一瞬だけ、霧崎が目を見開いた。しかし、照れるように頬を掻くアキラを見た途端に、その顔は満面の笑みに染まった。

「喜んで。しっかりエスコートして下さいね」

「ちょ、腕絡めんじゃねえ！」

笑い声や怒鳴り声の余韻を残しながら、二人は夜の静寂へ消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6392x/>

イドの底から

2011年11月23日22時54分発行